



ねこメットさんと森の家



絵・文 うなむ

ある日の午後、ちひろは新しい自転車を夢中でこいでいました。大きな太陽とわた菓子みたいな雲が、ちひろの麦わら帽子のずっと上からどこに行くのか見ていています。

この街に引っ越してきてから一ヶ月、ちひろはずつと気になつていた場所に向かっていました。それは街のはずれにある大きな森の中。そこには一軒の家があり、男の人が住んでいるそうです。でも街の人たちは誰もその姿を見たことがありませんでした。なぜなら、大人も子どもも怖がって近づかないからです。ときおり郵便屋さんだけが訪れているみたいです。これは全部、向かいに住んでいる大家さんとママが話しているのを、ちひろがこつそり聞いた話でした。

ちょうど、ちひろが森に着いたときも、郵便屋さんがバイクで出てきたので、ちひろは慌てて近くの茂みに隠れました。

「やっぱり人が住んでいるんだわ」

ちひろは思いました。

郵便屋さんが去ったのを確認して、ちひろはハンドルを強く握り、自転車ごと森の中へ飛び込みました。

どこまでも続きそうなまっすぐな道を、ちひろは自転車で走っています。期待と不安がちひろの中を出たり入ったりしています。それでもペダルの勢いは止まりません。

学校の先生からは大人しいと言われるちひろですが、本当は好奇心旺盛な元気な女の子でした。ただ、前の学校でちひろの赤い髪がかわされてから、すっかり消極的になってしまったのです。パパもママもそれを分かっているので、ちひろを優しく見守っていました。

そんな二人が買ってくれた水色の自転車と麦わら帽子で、ちひろはちょっとした冒険をしてみたくなったのでした。だからこのお出かけは誰にも内緒の内緒のことなのです。

「パパもママもびっくりするかしら？　ううん、知られたらきっと怒られるわね」

ちひろは両親の怒った顔を想像してくすっと笑いました。
「でも、ちらつと見るだけだし問題ないわ」

すると、少し先の方に猫の形をしたポストがあるのが見えました。
きっとさつきの郵便屋さんはここに手紙か何かを入れに来たのでしょう。

ちひろがポストに近づくと“ねこメット”と書いてあります。
「これ名前かしら？」

ちひろはポストの敷地内にある家らしき建物に気づきました。こちらも猫の形をしています。

「もしかして猫でも住んでいたりして」

ちひろが背伸びして家をよく見ようとした時でした。玄関のドアが開き、誰かが出てきました。ちひろはびっくりしてしまい、その拍子に自転車を倒してしまいました。ガシャーンという音で家の人はこちらに気づき、ちひろのもとへ近づくと、

「おやおや。これは可愛らしいお客様だ」

そう言つて、自転車を起こし、ちひろにニッコリしました。ちひろは声が出ませんでした。なぜならその人は、顔の半分まで猫の耳のついた被り物をしていました。

ちひろが目をパチクリしているとその人は言いました。

「ごめんよ、怖がらせてしまったようだね。僕に何か用かな？」
「えーと……」

ちひろは返事に困りました。興味本位でここに来るのが目的だつたなんて言つたら、きっととつても失礼になつてしまふと思つたのです。

そんちひろの横でその人はポストを開けて言いました。

「お、これはオーランドさん」夫妻からの手紙だ。そしてこつちはエミリーさんだ。キレイな海の写真のポストカードだよ。見てごらん、素敵だろう。みんな元気かな」

その人がとても無邪気に話しかけるので、ちひろもなんだか楽しい気持ちになつきました。

「さてと、これから庭で採れたハーブでお茶にするつもりなんだ。良かったら君も一緒にどうだい？もちろんクッキーもつけよう」

その人の言葉にちひろの目は輝き、胸が高鳴るのを感じました。
なんてなんて素敵なことでしょう。この街に来てお茶のお誘いは初めてでした。

しかし、ちひろは思い出しました。見知らぬ人の家にお邪魔することは、学校でも家でも禁止されているのです。

ちひろは黙り込んでしまいました。

するとその人は何かを感じ取ったようでもちひろに言いました。

「おっとこれは失礼。まだよく知らない相手の家だと君も困つてしまふね。まずは自己紹介をしてからだ。僕は、ねこメット。この被りものがその理由さ。ここで猫一匹と暮らしているよ。年齢はそうだな、秘密にしておこう。その方が神秘的で面白いだろう。さあ、次は君の番だよ」

自分の気持ちを分かってくれたことが嬉しくて、ちひろは目の前にいるその人を知りたいと強く思いました。

「わ、私はちひろです。一か月前にここに引っ越してきました。今日はその、この森の中に家があるって聞いて、見たくなつて、えーと、

来てしました。『めんなさい』

「あははは。素晴らしい探求心だね。よろしく、ちひろ」
そう言われて握手した手は、とてもあたたかくて大きいとちひろは
思いました。

「ではあらためて。ちひろ、良かつたら僕の家でハーブティでもいか
がかな?」

「はい! ねこメットさん」

ちひろは思いきりいい返事を返しました。ねこメットさんはまた、
あはははと笑いました。

ねこメットさんの家に入ると、たくさんの中の被り物がありました。

どれも違う柄で、どれも猫の模様のようです。

「ああそれはミケ、右のはシマ、左には黒や白のもあるだろう。ぜんぶ僕の手作りさ。そして今日はキジトラの気分なんだ」

ねこメットさんは自分の被りものを指さして言いました。

「これ帽子ですか？」

「帽子というか顔を半分隠すのが目的で作ったんだよ。僕がねこメットと名付けてね」

「なぜ顔を……」

ちひろがそう言いかけたときニャーという声のような音がしました。ねこメットさんが火にかけていたヤカンでお湯が湧いたのです。そのヤカンも猫の形をしていて、どうやら沸騰するとニャーと鳴くみたいですね。

「これも僕の手作りでね、上手く鳴くようになるまで苦労したよ」「すごい！何でも作れるんですね！」

「ふふ。ちひろ、僕に敬語はいらないよ。友達のように話していいんだよ。僕らはもうお茶をする仲なんだからね。さあ、そこに座つて」ちひろは言われた通り猫の形をした椅子にちょこんと座りました。

「今日のハーブティの味はちひろの口に合うかな？どうぞ召し上がれ」ねこメットさんは猫の形のクッキーも出してくれました。ちひろはハーブティを一口飲んでみました。

「美味しい。」

それは胸がほっこり優しくなるような味でした。ちひろの言葉にねこメットさんも満足そうです。「さて、ちひろにはもう少し僕の話をしようかな。」

ちひろは少し背筋を正して座りなおしました。

「ああ、くつろいだまままでいいからね。ゆつたりして聞いておくれ。
僕はね、こう見えて幼いころからとても人見知りがひどくて、人と話
すことや接することがとても苦手でね、いつもひとりでいたんだよ」

ちひろは“いつもひとり”という言葉に胸がチクつとしました。

「そんなある日、おばあさまが編んでくれた帽子をたまたま、鼻まで
すっぽり被つてみたら、ちょうど目の位置に穴が少しあいていたんだ。
きっとお茶目なおばあさまの計らいだと思うけど、僕はそのまま外に
出てみたくなつて家から学校まで歩いてみた。周りの人は変な目で見
ていたけれど、僕と分かると話しかけてくれて、僕は自然と会話する
ことが出来た。不思議だよね。とうぜん笑われることもあったけど、
それは当たり前のことだと思つて、僕はその状況をすんなり受け入れ
たんだ。それよりも被りものすることで、こんなにも怖さが消えるの

が不思議だつたし、閉じこもつていた僕の世界がずっと広がること
が楽しくてね、そのときからもう被りものは僕の一
部になつたんだ」
　ねこメットさんはまるで、ちひろに自分の宝箱を見せるように話
を続けました。

「それからは自分で作れるようになつて、今では世界中から注文が
来るよ。さつきの手紙のように僕の作ったねこメットで、たくさん
の人が僕と同じように楽しい人生を歩んでいるんだ。僕はそんな素
敵なお手伝いができるて最高の気分なんだよ。もちろん今でも、何も
被つていなければ人と話すのは苦手なままだけね」

あはははと、ねこメットさんは笑いました。

ちひろはさつきよりもねこメットさんをグッと近くに感じました。
「ただ、ねこメットを被つていると、周囲が不気味がるからね。ここ
にひつそり住んでいるのさ。だからちひろが来てくれてとても嬉しい

よ

そう言つて、ねこメットさんはクッキーを口にひょいっと入れました。

「ここにはいつから住んでいるの？」

ちひろもクッキーをほおばりながら聞きました。

「そうだな、僕と猫のちーちゃん二人で住んでもうすぐ三年になるかな。ここはもともとおばあさまの家だつたんだけど、亡くなつてからは、僕が譲り受けて、今の形にリフォームしたんだよ。素敵だろう？」

するとちひろの膝の上に茶色の猫が乗ってきてニャーと鳴きました。今度は本物の猫の鳴き声です。

「この子がちーちゃん？」

「そうだよ。おばあさまと同じ名前のチハルでちーちゃん。あ、ちひろもちーちゃんと一緒だね。もしかして友達にもそう呼ばれているん

じゃないかい？」

それを聞いてちひろは猫のちーちゃんをなでる手を止めました。

そのままちひろが何も話さないので、ねこメットさんは「おや？」
という顔をしましたが、ちひろが話し出すのをハーブティを飲んで
ゆっくり待っていました。

「あのね、ねこメットさん。私、前の学校でこの赤い髪のせいでいじ
められたの」

そう言つて、ちひろは麦わら帽子を取りました。

実は、ねこメットさんは、玄関で帽子を取らないちひろに気づいて
いました。そしてちひろの赤い髪を見て口元をニッコリさせて言いま
した。

「とても素敵な赤色だ。庭に咲いているティチュールの花と同じで、
すごくきれいな色をしているね。僕はその髪の色好きだよ」

ちひろはポロ。ポロと涙をこぼしました。そんなこと言ってくれたのはパパとママしかいなかつたからです。

猫のちーちゃんがニャーと鳴き、ねこメットさんはちひろにハンカチを渡しました。

涙をふきながらちひろは言いました。

「私もねこメット被つて強くなりたい」

ねこメットさんは微笑んで、首を横にふりました。そしてすごく優しい声でこう言つたのです。

「大丈夫だよ、ちひろ。その必要はないさ。だって、僕はその髪の色をとても美しいと思ったんだ。きっと他にもそう感じる人がいるはずだよ。」

ちひろはパパとママを思い出しました。

「それにきっと、ちひろ自身も本当はその髪の色が好きなはずなんだ」

ちひろはハツとしました。

「僕はね、僕の考え方としてはだよ、神様は自分で自分を好きになれないような部分を、その人間にお与えにならないと思つてはいるんだ。これはおばあさまの受けうりだけど、僕もそれを心から信じてる。だつて僕は自分の人見知りのおかげで、堂々とねこメットを被つてこうして楽しく暮らしているんだもの。いや・・・こつそり森の中で暮らしてゐるから堂々と、とは言えないか」

あははは、とねこメットさんはさつきよりも大きな声で笑いました。

ちひろも「確かに」と思わず笑つてしましました。

「むしろ僕は人見知りを治す氣はないんだ。これは僕の個性の一つだし、何よりねこメットが被れなくなつてしまふからね。そつちの方が僕にとつては大問題なんだ。たとえ変わりモノと言われてもね」

ちひろはねこメットさんの身振り手振りを交えた話がおかしくておか

しくて声をあげて大笑いしていました。こんなに笑ったのはずいぶんと久しぶりのことでした。

「さあちひろ、もっとクッキーをお食べよ。ハーブティももう一杯入れようか？」

「ねこ」メットさんはちひろを見てニコニコしていました。

「ううん、いいの。あんまり食べると、夜の『ごちそうが食べられなくなっちゃうから』

「『ごちそう？何かのお祝いかい？』

「あ、今日、私の誕生日だから、ママが『ごちそうを用意してくれてるはずなの』

「そうなのです。今日はちひろの十歳の誕生日なのです。

「何だつて！」

「ねこ」メットさんはすぐ驚いて、少し考え込んでから、「ちょっと

「こで待つていておくれ」と言つて、ちひろを部屋に残して庭に走つて行きました。

「どうしたのかな？」

ちひろが言うと猫のちーちゃんがまたまたニヤーと鳴きました。

ハーブティもクッキーも無くなつたところに、ねこメットさんが戻つてきました。

「これをちひろに。お誕生日おめでとう」

ねこメットさんがお祝いの言葉とともにちひろに渡したのは、赤い花がぎっしりの大きな花束でした。

「それがさつき言つたティチュールの花だよ」

確かにちひろの髪と同じ色をしています。ちひろはたまらなく嬉しくて、ねこメットさんの頬にキスをしました。

「ありがとう。ねこメットさん。私、もう髪の毛隠さないことにした」「ふふふ。そうか。でも、急ぐことはないからね。ゆっくりでいいんだよ」

「うん、今日は『ちそつさま』。そろそろ帰らないとママに怒られそうだわ」

「そうだね。またおいで。ただし午前中は遠慮しておくれよ。僕は夜型で昼すぎにならないと起きていらないからね」

「それじゃ本当の猫みたいね」

「なんだ。ねこメットだからね」

二人はくすくすと笑い合いました。

「さてちひろ、ひとりでこの森の中から帰れるかい？」

「うん、まだ明るいから、平気だよ。またね、ねこメットさん」

「うん、いつでもおいで。待ってるよ」

ねこメットさんはちひろが見えなくなるまで、ずっと手を振つくれていました。

「ねこメットさんの本名ってなんだつたのかしら?」

ちひろはひとりごとを言いました。

でも、いいのです。今度来たときには聞けばいいのですから。

十歳の誕生日、新しい自転車と麦わら帽子で、ちょっととした冒険に出たちひろを待っていたのは、思いもよらない素晴らしい出来事でした。ねこメットさんという素敵なお友達が出来たこと。ティチュールというちひろの髪と同じ赤い花束を貰つたこと。そして、生まれて初めて自分の髪の色を誇らしく思ったこと。

きっときつとパパとママに話したら最初は怒られてしまうでしょう。

それにもしかしたら上手に話せないかもしれません。それでもちひろは今すぐ話したくてウズウズしていました。だってどれも二人が喜んで聞いてくれると分かっているからです。

大きな太陽が西に沈みはじめ、わた菓子みたいな雲はすっかり姿が見えなくなつたころ、ちひろが家の前に着くと、大好きなスープの匂いがしました。ママがちひろの大好物をたくさん作っているのでしよう。

ちひろはとびつきり元気なただいまで家に入つて行きました。

